慶應義塾大学
教養研究センター

http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1
Tel 045-566-1151 Fax 045-566-1102
Mail toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

単位認定・少人数ゼミ形式

教養研究センター設置科目

いま、最先端の学問は「教養」かもしれない。

2019年度 全体ガイダンス

4/4 Thu. 16:45~18:00 〈会場〉DB203

慶應義塾大学教養研究センター

「教養」のすゝめ

大学は専門教育と教養教育の両輪で成り立ちます。

なぜなら、複雑な現実社会の中で専門的知識はそのまま役立つものではないからです。

専門的知識は応用しないと、現実には、はまりません。

応用するために必要なもの。

それが教養です。

さらに専門教育は限られた一分野に徹するから専門。

世の中を生きていくためには専門だけでは偏ります。

そこでも教養は不可欠なのです。

福澤諭吉先生も言っています。

「決して字を読むことのみを勧むるに非ず」

『学問のすゝめ』の中の言葉です。書斎で狭い学問をしているだけでは駄目だということです。

社会的・実践的に、からだを動かして学ぶことまで含めた、広い学問の必要性を述べた言葉です。

福澤先生による「教養のすゝめ」と解してよいでしょう。

教養研究センターは慶應義塾における教養教育の力強い担い手です。

様々な授業を設置して、学部のしきりにとらわれない、教養教育の実践に取り組んでいます。

ぜひ、全体ガイダンスに参加いただき、履修の参考にしていただければと思います。

担当教員からのメッセージ

アカデミック・スキルズⅠⅡ

Academic Skills

レポートと論文の違い。
プレゼンテーションの仕方を基本から学びます。

法学部教授 **片山杜秀**

論文の書き方、プレゼンテーションの仕方を徹底指導。滅多にない授業です。大学の授業ではレポートを書く機会が増えます。3、4年生になると論文の執筆を求められることもあるでしょう。では、レポートと論文はどう違うのか。さらに内容を口頭で発表するときはどうするか。アカデミック・スキルズはそのスキルをみなさんに伝授します。

身体知

Learning Through Affective Experience and Active Participation

言葉と体を通して
全く新しい自分に出会ってみよう。

法学部教授 **横山千晶**

普段皆さんが読んでいる物語や小説。それを声に出して読んでみたら・・・他者と一緒に議論してみたら・・・絵や歌、体を使って表現してみたら・・・。ふだん私たちが「学び」と思っていることを全く異なる方法で「体感」してみる授業です。

生命の教養学

The Liberal Arts of Life

文系・理系の垣根を越えて
「生命」をめぐって繰り広げられる白熱の議論。

商学部准教授 **西尾宇広**

「学際的」という言葉を知っていますか？　多様な専門領域を横断しながら新たな「知」を生み出していく学問の方法を指す言葉です。この授業は、ふだんは異なるフィールドの第一線で活躍している人文・社会・自然科学の専門家11名によるオムニバス講義。「生命」をめぐる「学際的な知」の現場をぜひ体感してください。

身体知・音楽ⅠⅡ

Learning Through Affective Experience and Active Participation: Historical Performance Practice of Music

歴史的音楽（器楽・声楽）を、
当時の演奏習慣に基づき演奏していきます。

器楽：経済学部教授 **石井明**
声楽：講師（非常勤） **佐藤望**

音楽は、身体を介在し表現され、歴史の中で常に、人間の知的な活動と連携してきました。この授業では、音楽を身体で表現することを通じて、歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から見つめ直すことを目的としています。

日吉学

Hiyoshi-ology

ここでしか学べません。
過去から未来を読み解く体験型教育プログラム

経済学部教授 **不破有理**

「日吉学」の特徴は、他では考えられない顔ぶれと手法と素材が合体すること。多様な受講生と共に探検・体感し、テーブルを囲み、新鮮な発想をぶつけ合い、多彩な教授陣と共に考えます。教材には塾生なら必見の歴史的宝物が続々登場！

アカデミック・スキルズⅠⅡ

知の基礎を築く

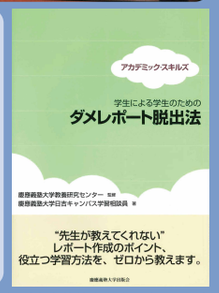
大学では「自ら考え、調べ、論ずること」が求められます。これは学問研究の出発点であると共に、長い人生を送る上で不可欠な「教養」という知的基礎体力を身につけるための基盤でもあります。そこでこの「自ら考え、調べ、論ずること」の体得を目指して、問題意識の喚起、具体的な問題発見に始まり、問題解決に至るまでに必要とされるさまざまな学問的・知的作業のためのスキルを身につけることがこの授業の目的です。多分野にまたがる複数の教員が担当しており、学生の自主性を尊重し、学生の知的関心を活性化させるための授業が展開されています。少人数セミナー形式の授業で、日本語3クラス、英語1クラスの合わせて4クラスが設置されています。年度末には、各クラスのメンバーが参加して、論文とプレゼンテーションのコンペティションが実施されています。

授業の特長

学部共通科目で少人数制
色々な学部、学年の学生との出会いや議論を通じて、多様な個性や価値観とふれあうことができます。

１クラス３名（原則）の教員が担当
複数の先生と接することで、複眼的思考や多様な解決手法を学ぶことができます。

１年のまとめの論文を「アカデミック・スキルズ学生論文集」として刊行
これまでに刊行された論文集は図書室で閲覧することができます。

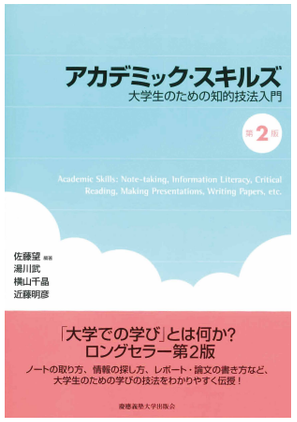


慶應義塾大学日吉キャンパス学習相談員「学生による学生のためのダメレポート脱出法」（慶應義塾大学出版会、2014）

授業紹介

論文を書き、発表する。
全ての過程を系統立てて学んでいきます。

論文を書くためにはどうするか。テーマの選び方・絞り方。図書館やネット上での情報の探し方。論の立て方・進め方。結論の出し方。さらにそれを口頭でスライドを付けて大勢の前で発表するためには？それらのスキルを順々に系統立てて学んでいきます。大学で学問するためにも、社会に出てからも、末永く役立つ内容です。授業は少人数セミナーのスタイルをとります。塾生20名に対して教員3名というのが基本です。通年で履修してもらい、春学期にはまず4000字の論文を作成します。そして秋学期には、より本格的な8000字の論文を作成し、仕上がった論文をさらに口頭で発表する訓練を行います。年度末には各クラスから最優秀の論文と発表者が選抜され、2月に開催される大きなイヴェント、アカデミック・スキルズ・プレゼンテーション・コンペティションに参加してもらいます。この厳しくも楽しいコンペティションで、1年の幕がおります。



佐藤望（編著）・湯川武・横山千晶・近藤明彦
「アカデミック・スキルズ
大学生のための知的技法入門 第2版」
（慶應義塾大学出版会、2012）

論文コンペティション入賞作（一例）

法学部 2年	障害者雇用を通じた差別なき社会へ―日本の障害者雇用の課題―
文学部 1年	谷崎の虚偽と三島の真実―マゾヒズムを通じて男性を考える―

プレゼンテーション・コンペティション入賞作（一例）

医学部 1年	Can We Produce Designer Babies in Japan?
薬学部 1年	「生きている」という認知―クラゲに生物らしさを感じるのはなぜか―

学生の声

**グループ活動の
難しさを知りました。**

商学部1年（2018年度受講生）

講座の魅力は、グループ活動の機会と論文を執筆する機会を得ることができることです。受講することで、グループ活動の難しさがわかるようになりました。授業を取れば論文を書けるようになるというわけではなく、主体性を持って、論文を書くためのスキル、一つひとつを磨き続けることが大切です。

**徹底的に
調べる機会を得られました。**

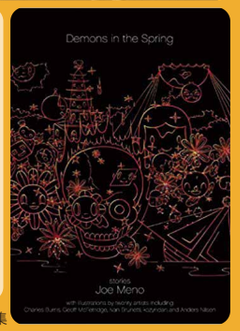
理工学部1年（2018年度受講生）

論理的な文章が書けるようになりたかったということと、興味があることについて調べる機会が欲しかったため、アカデミック・スキルズを受講しました。講座を通じて、自分の好きな内容について徹底的に調べ、まとめることで、調べた内容についてかなり詳しくなるとともに、文章を書く能力もつきました。アカデミック・スキルズという機会がなければ、調べることすらしなかったと思います。受講を迷っているなら、履修してみるのも良いのではないでしょうか。苦労することもありますが、確実に自分の力になります。

身体知

創造的コミュニケーションと言語力

私たちはもちろん体を通して生きている。それは当然のことですが、あらためてこの「身体」に注目した全く新しい学びの在り方を、自分たちで探っていくワークショップ形式の授業です。鑑賞する対象の芸術作品を他者とともに議論したり、身体ワークショップを通して解釈したりしてみると、どんな新しいことが見えてくるだろう。そこから自分たち自身が創作者になってみたらどうだろう。創作したものを他者はどう見るだろう。そんな経験をワークショップを通して、異なる世代とともに味わうことが「身体知」授業の醍醐味です。夏季休暇中の1週間を使って、集中的に通信教育課程の学生と通学生がともに活動するのもこのクラスの特徴。「学び」、「仲間」との新しい出会いのみならず、新しい自分との出会いが待っています。



2017年度、および2018年度の題材をとったジョー・ミノの短編集

授業の特長

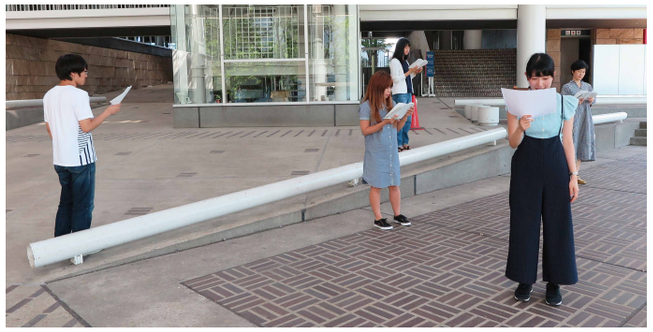
全く新しい学びの体験
座学ではない、頭も体も総動員する授業です。

異なる世代が集う授業
通信教育課程の学生と通学生とが世代を超えて、学ぶ場を共有します。

夏期集中コース
夏季休暇の1週間を使った集中コースです。

授業紹介

言葉に命を吹き込んでみる。



通学過程と通信教育過程の学生がともに学ぶ場です。いくつかの短編小説を「読む」・「声に出す」・「作品について語る」ことを通して、言葉が織りなす様々な意味を味わってみましょう。自分がそこから読み解くことが他者とどう異なるのか。声というものを通して文学作品を読むと、どう自分の解釈が異なってくるのか。直に体感してみてください。その後、様々な身体ワークショップを取り混ぜながら、創作へと向かいます。他者の話を「聴く」・「からだで表現する」・「言葉で表現する」といういくつかの段階を経て、そこでの体験をもとに、言語や身体を使った新しい創作表現へとつなげます。性別や年代が異なるクラス環境だからこそ可能になる授業内容を展開していきたいと思っています。最終的に成果を一般に公開するミニ公演を開催し、皆さんの作品を他者とシェアします。

近年のテーマ

2017年度
現実と非現実

今回は「現実と非現実」をテーマに授業を行いました。藤枝静男の短編小説「一家団欒」と、アメリカの若手作家、Joe Menoの"People Are Becoming Clouds"を題材とし、作品の朗読とディスカッションを行い、そこから各自の創作へとつなげました。朗読においても個人で朗読する、グループで身体表現を行いながら朗読する、などの複数のやり方を試み、その後でディスカッションを行い、新たな解釈を導き出していきました。

2018年度
「伝える」

今回は「伝える」をテーマに授業を行いました。夏目漱石の短編小説「夢十夜」からの「第一夜」と、「永日小品」から「蛇」、そしてアイルランドの作家、Ethel Rohanの短編小説、"The Gutter"、および去年も取り上げた作家、Joe Menoの"The Architecture of the Moon"を題材とし、作品の朗読とディスカッションを行い、そこから各自の創作へとつなげました。作品の世界を様々な方法で体感するために、朗読のみならず、ブラインドウォークや絵による表現なども行いました。

学生の声

授業で生の感覚を体感してほしい。

法学部1年(2018年度受講生)

素敵な作品に出会えただけでも、授業に出て本当によかったと思います。特に「The Gutter」と「月の成り立ち」がお気に入りです。これらの作品は、個々で意見が異なるし、それを擦り合わせて意見交換をすると何倍も面白く、深い物語になるので、見つけた解釈をこれからも大切にしたいです。身体知の授業を、こうやって言語化しようと頑張ってみたのですが、文字は表現の一部でしかなく、、感じたこと、学んだことは感覚として残っているので、やっぱり授業に実際に参加しないとわからないと思います。だからこそ、生の感覚を体感することをお勧めします。

様々な価値観を学ぶのに最適です。

理工学部1年(2018年度受講生)

色々な世代・バックグラウンドを持った人とともに、一つの文章について議論し朗読することは、貴重な体験でした。今まで文学作品を読んでも考えが一つに凝り固まっていて面白さを十分理解できていなかったけれど、この授業で色々な解釈を聞いて様々な観点で見ることができるようになり、面白さをもっと深く理解できるようになった気がします。私は理系で受験勉強に忙しく、高校生活では文章をじっくり読んで、議論し合うことや、絵で表現するということができませんでした。しかし、この授業は中学校の音楽、美術、体育、国語が混ざったような授業で、新鮮に楽しめる内容になっていると思います。

生命の教養学

生命の経済

2018年4月17日 堀田耕司氏

この授業は「生命とは何か」「生きるとはどういうことなのか」という問いから始まる知的探究への誘いです。「生命」については生物学をはじめ、主に自然科学に属する諸分野が「生命科学」の枠組みで研究を進めていますが、それだけではありません。哲学・文学・歴史学・文化人類学などの人文学、経済学や政治学といった社会科学もまた、それぞれ異なる角度から「生命」を問い続けているのです。もとより一面的には捉えがたいこのような対象にアプローチするうえで、必要なものとは何でしょうか。それは、特定の学問領域に偏ることなく広く思考の素材を追い求め、各領域の研究成果には十分な敬意を払いつつも、その雑多な素材を元手として新たな知を創り出そうとする態度にほかなりません。ときに「教養」とも呼ばれるそのような態度を涵養する場、それがこの「生命の教養学」なのです。

赤江雄一(編)「飼う 生命の教養学13」(慶應義塾大学出版会、2018)

2013年4月26日 牛場潤一氏

赤江雄一(編)「食べる 生命の教養学12」(慶應義塾大学出版会、2017)

授業の特長

多彩な分野を代表する講師たちによっておこなわれるオムニバス授業

自然科学、社会科学、人文学など、多彩な分野のそれぞれ最先端で活躍している講師が週替わりで登壇し、濃厚な講義をおこないます。各講義では原則として1時間程度の講義のあと、自由な質疑の時間が設けられます。学期の最初と最後には、コーディネーターによるオリエンテーションと総括がおこなわれます。

2014年7月4日 長沖暁子氏

授業紹介

2018年5月8日 鳥海崇氏

「生命の経済(エコノミー)」
― 命をめぐる生産・交換・消費のダイナミズム。

2019年度のテーマは「生命の経済」です。私たちの命は日々の経済活動と密接に結びついています。生きるために働かねばならない私たちは、生産と消費、交換や共有や分配という経済的サイクルを逃れられない存在だからです。しかし、話はそれで終わりません。「経済economy」という語の語源である「oikonomia」は、古代ギリシャ語の「家oikos」と「法nomos」から成る合成語でした。時代を経るなかで、この語は本来の「家政」という意味に加えて「国政」、さらには「神」による「宇宙」の支配をも比喩的に表すようになっていきます。つまり「家政＝経済」とは、広大な自然の秩序から集団としての社会的秩序、さらには微細な個体内部の秩序にいたるまで、さまざまな局面での秩序のありようを生産・交換・消費といった動的な要素に着目して捉え直す観点であり、その中心にはつねに「生命」へのまなざしがあるのです。本年度は、環境化学、生物化学、数理ファイナンス、心理学、経済学、経営史、人類学、科学哲学、政治哲学、現代思想といった諸分野から「生命」と「経済」のこの複雑な関係に迫ります。

2019年度「生命の教養学」出講講師

- ■成長とその運命：生命体と社会の「全般経済」
  石川学 (慶應義塾大学商学部専任講師)
- ■アリストテレスの政治学における生命と経済と互恵性
  稲村一隆 (早稲田大学政治経済学部准教授)
- ■環境基準とは何か
  奥田知明 (慶應義塾大学理工学部准教授)
- ■技術と社会経済システム
  駒村康平 (慶應義塾大学経済学部教授)
- ■細胞におけるタンパク質の翻訳後修飾の意味
  清水史郎 (慶應義塾大学理工学部教授)
- ■「生命の経済」という視点からみた人間の特異性
  田中泉吏 (慶應義塾大学文学部助教)
- ■「死亡リスク」と「長生きリスク」～ファイナンスという観点から～
  中川秀敏 (一橋大学大学院経営管理研究科教授)
- ■行動経済学とビッグデータから探るヒトの意思決定と行動
  星野崇宏 (慶應義塾大学経済学部教授)
- ■屠畜と肉食のポリティクス―南アジアの牧畜社会と宗教実践
  宮本万里 (慶應義塾大学商学部准教授)
- ■心のダイナミズム
  森さち子 (慶應義塾大学総合政策学部教授)
- ■黎明期資本主義における市場・福祉・公共善
  山本浩司 (東京大学経済学部准教授)

予定、敬称略。肩書きは2019年4月現在

過去の開催一覧

2018年度 ●「組織としての生命」　2017年度 ●「感染」　2016年度 ●「飼う」　2015年度 ●「食べる」

学生の声

一つの授業で幅広い視野を身につけられる、なかなかない機会を得ることができました。

理工学部1年
(2018年度受講生)

自分は昔から生物に興味があり、理工学部で生物の研究をしようと考えていました。本講座の受講を決めたのは、生物の研究をするにあたって、専門分野にのみ精通しているだけではなく、多角的な視点を持つことが必須だと考えたからです。授業には多くの分野から講演者が来てくださり、どの分野のお話も積極的に自分の頭で考えながら聞くことができました。授業を通じて、何か一つの物事について考えるとき、そのヒントは思いがけないようなところにあるということを知り、熱中するあまり一点しか見ることができなくなってしまうのではなく、常にアンテナを張っておくことが大事だと意識するようになりました。一つのテーマに向かって多くの異なる視点から考えるという機会はなかなかありません。聞くだけでなく、自分で考え、テーマに関連づけて自分なりの見方を作ることも大事になってくるので、思考力も高めることができました。

身体知・音楽ⅠⅡ

—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—
—古楽器を通じた歴史的音楽実践—

写真提供：（公財）横浜市芸術文化振興財団

音楽を通じて歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から理論的に見つめ直します。音楽演奏の実践体験によって、身体を通じた歴史・文化・言語の総合的な学習を行います。
器楽・声楽それぞれ歴史的音楽作品の演奏実践を行い、耳と感性知識、身体を結びつけ、それによって身体を媒体として継承される歴史・文化・言語の連関を実際の体験によって学びます。学期末に公開演奏会を行い、学内・地域に開かれたかたちで成果を披露します。

授業の特長

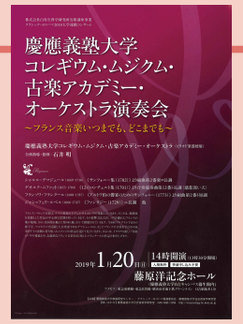
声楽アンサンブルと、器楽アンサンブルの2つの部門に分かれて行われます。

声楽アンサンブル部門

本格的なヴォイス・トレーニングを行い、古今の合唱音楽の実践を行っていきます。それぞれが自律した演奏者として、他者の音とリズムを感じ、感覚を研ぎ澄ませて、音楽を作り上げていく授業です。

器楽アンサンブル部門

バロック・ヴァイオリンやチェンバロなど、一般的に古楽器と呼ばれているバロック時代の楽器を用いて、17世紀および18世紀の西洋音楽を実践的に学んでいくというのがこの授業の最大の特徴です。



授業紹介

声楽アンサンブル部門

ここで行う合唱音楽は、皆さんが高校などで体験してきたものよりもさらに一歩上のレベルを目指しています。ときには、聞き慣れた混声４部合唱ではなく、6声、８声、ソロが加わったり、器楽アンサンブルが加わったりといった皆さんがこれまでに経験したことのないような、多彩なレパートリーも取り上げています。少人数のアンサンブルで重要なことは、一人一人の発する声が、それぞれ自律した音楽表現が可能になっていること、そして、それらが重なり合うことによって新しい音響的広がりを聞かせていくことです。それぞれの声の自律、音楽感覚の自律があって、美しい音楽を鳴り響かせることができるのです。そうした音楽創りを目指しています。そのために、まず、しっかりとした呼吸法、声の基礎トレーニングを行い、楽譜の伝えるメッセージを時代背景に注目しながら読み解き、それを音にしていきます。これを通じて、履修者の皆さんの音楽に対する意識・感覚が、新しいものとされていくでしょう。

器楽アンサンブル部門

バロック・ヴァイオリンやチェンバロの他に、バロック・ヴィオラ、バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、バロック・オーボエ、リコーダー、フラウト・トラヴェルソ、バロック・ファゴットなどの、バロック時代に使われていた楽器を用いて、当時書かれた、トリオソナタなどの室内楽編成のための作品と、より大きめなアンサンブルであるバロック・オーケストラ（20人程度）のために書かれた音楽作品を取り上げ、バロック時代の音楽作品について深く理解していきます。実践を通じ、17・18世紀の作曲家たちが何を演奏者に、そして聴衆に求めていたのかということや、17・18世紀の器楽作品には、どのような音楽的メッセージが込められているのかということなどを、現代ではなく、当時使われていた楽器を用いることで探求していきます。なお、使用ピッチはa=415となります。一年を通じて、2回ほどの成果発表演奏会を、協生館藤原洋記念ホールで行う予定です。

この授業は、日吉音楽学研究室と
連携して行っています。
詳しくはホームページ
http://www.musicology.hc.keio.ac.jp/ を
ご覧ください。

学生の声

**プロの演奏家の手法も学べる
古楽器を演奏する、貴重な経験も魅力。**

文学部４年（2015年度受講生）

声楽アンサンブルを通じて音楽の歴史的・理論的理解を深めるという内容を見て、以前から習っていたピアノへの理解にも繋がると考え受講しました。秋学期のはじめの頃のプロの演奏家の方々との合わせが印象的です。楽譜や歴史的・理論的な背景や、先生の要望に対して、日本に限らず世界で活躍されているプロの演奏家の方々が、どのような技術でこたえているのかを勉強する良い機会となりました。
授業の魅力は、古楽器とのアンサンブルやバロックの声楽アンサンブルの曲を演奏するという、普通の学生生活ではめったにできない経験ができる点です。自分が演奏しているときの音の聴き方が変わり、この講座を受ける前に習ってきたことの意味がわかってきたような気がします。具体的に言葉で表現できないので、ぜひ受けてみて、変化を体験してみてください。

**ホールで発表する体験も貴重でした
古楽器から学んだ音そのものの美しさ。**

文学部3年（2015年度受講生）

受講を決めたのは、音楽を実際に演奏することで作品の特徴を知りその魅力を体感することができると考えたからです。古楽アンサンブルの授業を選択していますが、何よりも第一の魅力は古楽器を用いて演奏できるということ。そして室内楽、あるいはオーケストラの曲を演奏する中で先生から曲の理解、表現方法について適切に指導して頂けることが魅力です。そして何より、実際に自分たちも、毎年2回、ホールで発表するという貴重な機会の中で、様々な学年の受講生とともに演奏をする貴重な場で、良き音楽仲間に出会えるのも大切な経験になりました。この講義を通じて、古楽器の演奏を通じて音の純度、音そのものの美しさについて気づくことができましたし、発表の場が多くコンサートにも多少場馴れすることができるようになり、集団で演奏する上で必要なコミュニケーションを意識しながら楽しめるようになったのが成長を実感するポイントです。

日吉学

縄文編

日吉キャンパスには広大かつ豊かな自然や歴史環境があります。縄文、弥生、古墳時代の遺跡や1200種を超える生物や植物が生息する森、アジア太平洋戦争末期の帝国海軍の秘密基地や建築史上重要な建造物。福澤先生は『学問のすゝめ』で、「事物の観察」が学問の第一歩と語っています。「日吉学」では観察とフィールドワークを介して体感し、単なる知識の蓄積にとどまらず、生きた知へ発展させることをめざしています。
これからの社会には、文系理系にとらわれず多面的視点から生み出される創造的な発想が求められるでしょう。つい見過ごしがちな身近なことと現在の我々を取り巻く問題とのつながりに触れることで、広い視野と深い洞察力の重要性に気づき、グループで課題に取り組むことで、問題の発見・解決における個人の主体性と他者との対話・協働の大切さを学びます。

授業の特長

慶應義塾唯一の授業 慶應のお宝に触れ学びます。

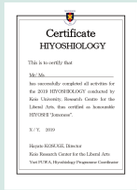
多彩な講師陣と幅広い受講者が魅力

対象は慶應義塾に在籍する中高生（オブザーバー）から大学院生まで。年齢の異なる参加者が混在するグループワークで、多様な発想からの刺激、異なる意見の調整方法を学ぶことができます。

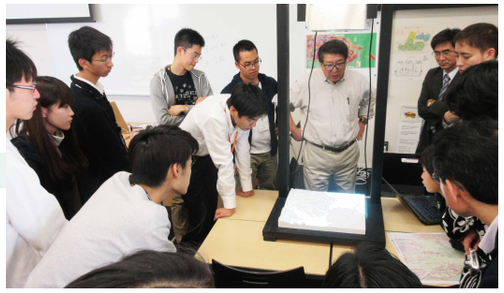
多様な「熱い」学びのかたち

講義とフィールドワーク・体験と討論。最終プレゼンテーションには予行演習で教員の指導、本番では学生と教員による熱い合評会。各自レポートの書き方も学べます。

**日吉学修了証がもらえる
公開発表会も予定されています。**



授業紹介



こんな授業があったのか 日吉に縄文？！
いつものキャンパスに潜む古層がみえる。

今年度は、「縄文編」と題して、数千年前という遠い過去に日吉の地で暮らした縄文時代の人々の生活に想いを馳せ、そこから現在の我々が考えるべき課題を見つけ出し、考察します。具体的には、慶應義塾が所蔵する実際の縄文時代の遺跡や遺物に触れながら、当時の人々の生活を想像することから始め、続いて、現在の地形を観察しつつ、プロジェクションマッピングなどを用いて縄文時代と現代との地形の違いとその要因を探ります。さらに縄文時代人の食糧をキャンパスのなかで探し、それを実際に採集、試食することで、自然環境や食糧といった軸で縄文時代と現在をつなげてみます。

180分7回の集中コース（秋学期前半）です。まず前半の3回で課題発見のための講義とフィールドワークを行い、続く後半の3回で、グループワークによる課題の整理、資料・情報の収集・整理、及び課題解決に向けての討論を進めてもらいます。グループごとに成果発表のプレゼンテーションを行い、各自レポートをまとめます。

【授業の形式】

秋学期短期集中180分プログラム

知識・体験

講義	フィールドワークや実験

↓

課題を見出す

グループワーク	ディスカッション

↓

まとめる

グループ発表	レポート作成

2019年度 講師紹介

- 安藤広道（文学部教授）
  縄文から戦争遺跡まで幅広く専門とする
  慶應のインディアナ・ジョーンズ？・考古学者
- 福山欣司（経済学部教授）
  日吉の広大な森の守護者・本当はカエルが専門の生物学者
- 不破有理（経済学部教授）
  本プログラムコーディネーター
  なぜかアーサー王伝説が専門の英文学者
- 大出敦（法学部教授）
  アカデミック・スキルズ教育のプロ
  本当はポール・クローデルが専門の仏文学者
- 阿久澤武史（高等学校教諭）
  日吉台地下壕保存の会の会長にして
  日吉の建築探偵・塾高の校舎をこよなく愛する国語の先生
- 太田弘（元普通部教諭）
  地図学・地図教育が専門
  名探偵コナン推理ファイル『地図の謎』の監修者
  マップコミュニケーターの異名も

敬称略。肩書きは2019年4月現在

学生の声

縄文人は単純な人間とイメージしていたが、縄文土器に触れたり縄文人の労働時間を計算したりして、そのイメージがとても変わった。
慶應義塾高校1年

この講義がなければ気が付くことがなかったことが多くありました。プレゼンテーションでは、論を進めるためにはもっとしっかりとした裏付けと、反論の余地を崩す作業が必要と気づきました。
薬学部1年

ドングリを拾って調理したり体験型の内容が非常に面白かった。
文学部1年

実際に見て、感じて考える、そして仲間と議論するという過程はとても意義深い。
法学部3年

双方向型の授業で面白いが、それ以上に面白かったのは事実の追認ではなく、背後に潜む「人間」について見れたこと。縄文人が何を考えたのかという点まで考えをめぐらす授業だった。
法学部1年

Information

庄内セミナー

『庄内に学ぶ「生命（いのち）」』 http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/shonai/

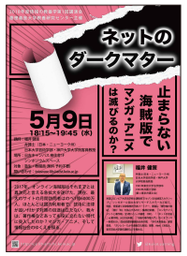
山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点にして開催している生命をテーマにした教養セミナーです。対話と議論を中心に据えつつ、専門家や地元の方々の話、体験・体感型プログラムを組み合わせた4日間、自然豊かな庄内の地で学部生・大学院生・塾員が一緒になって精一杯「生命」について考え、語り、体感します。即身仏拝観、修験体験、先端生命科学研究所ラボ見学など、過去・現在・未来が体の中を突き抜ける「学び」の場に立ち会ってください。

情報の教養学

http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/

現在、多くの人は、スマホやパソコンなどを用いて、様々な情報をインターネットから取得したり、発信したりしています。便利ではあるものの、情報漏洩やウィルスなどの危険があります。さらに、利用者のモラルも重要です。歩きスマホでさえ危険なのに、車の運転中にスマホでゲームをしていたため、事故を起こすケースが起きています。2019年度の「情報の教養学」では、「情報の光と影」をテーマに、情報の利用による様々なメリットやデメリットと共に、情報技術に関わる将来について、様々な分野の一流の講師に講演いただきます。

■2018年度 講演一覧



福井健策氏

田代光輝氏

堀潤氏

岡田美智男氏

小池康博氏

学習相談

アカデミック・スキルズの修了生の有志が、相談員として学習に関するさまざまな相談を受け付けています。お気軽にどうぞ！

期間（予定）：4月22日(月)～7月19日(金) 13:00～18:00
場所：図書館1Fスタディサポート

寄附講座

教養研究センターに提供される寄附金を基に運営されている講座です。この支援によって実験的な授業を展開し、質の高い授業が正規化され、毎年着実に成果を重ねています。

※詳細はポスター、web等でご確認ください。http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

Guidance（ガイダンス）

1 全体ガイダンス（教養研究センター設置科目ガイダンス）

4月4日（木） 時間 16:45～18:00 場所 日吉第4校舎独立館 地下2階 DB203

＊履修希望者は全体ガイダンスに必ず出席してください。（日吉学は4月4日もしくは4月9日に出席してください）

2 クラス別ガイダンス

※「身体知ー創造コミュニケーションと言語力」「日吉学：縄文編」以外は初回授業を兼ねています。

アカデミック・スキルズII —知の基礎を築く— 全4クラス

【月曜日5時限クラス】（英語版）… 4月 8日（月）
【水曜日5時限クラス】…… 4月10日（水）
【木曜日5時限クラス】…… 4月11日（木）
【金曜日5時限クラス】…… 4月12日（金）

時間 16:30～ 場所 来往舎1階 シンポジウムスペース

身体知 —創造的コミュニケーションと言語力—

【夏期集中講座】…… 4月 4日（木） 全体ガイダンスにて説明

生命の教養学 — 生命の経済 —

【金曜日3時限】…… 4月12日（金） 時間 ❶13:00～ ❷13:55～ 場所 来往舎1階 シンポジウムスペース（❶と❷の内容は同じです）

身体知・音楽II —合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—

【土曜日2時限】…… 4月 6日（土） 時間 10:45～ 場所 第8校舎811教室

身体知・音楽II —古楽器を通じた歴史的音楽実践—

【土曜日2時限】…… 4月 6日（土） 時間 10:45～ 場所 独立館 地下2階DB203

日吉学：縄文編

【秋学期 火曜日4・5時限】…… 4月 4日（木） 全体ガイダンスにて説明
4月 9日（火） 時間 14:45～ 場所 来往舎1階 シンポジウムスペース
（日吉学は4月4日もしくは4月9日に出席してください）

履修までの手続き

1 全体ガイダンスに出席
2 クラス別ガイダンスに出席
3 受講申込み
4 選考
5 結果発表
6 履修申告

1）クラス別ガイダンス（初回授業）に出席し、その際に氏名登録した学生のみに「受講申込」の権利を与えます。ただし、定員超過の場合は選考を行います。

2）選考結果発表で合格を確認した学生は、所属学部の履修案内に従って「履修申告」をしてください。

＊履修する授業を、どの科目名で履修するかおよび単位の認定は学部によって異なります。所属する学部の履修案内などでよく確認した上で履修申告してください。